

神事祭礼御禁制につき御請書

此の如く神事祭礼是迄奥所出候  
 其の節に及んで酒色淫楽等遊樂地  
 を禁む候に依り自然に飢饉艱難と  
 志を世に及ぶ是迄は成相違ひ村方々々  
 にお申上り申上り遊戯多分今後と  
 費し惜農田窮乏男女淫奔と媒と  
 呆志親妻子と弄台方々々或は喧嘩



上端之一命也抱不後成也其終也  
一家滅也一村衰廢也甚矣何也七百姓為  
之亦成矣何謂制禁不此成也其相背者  
何以遠而後之全有之也村故也其發  
光正百一石不用也其材方也其用極遠也  
其捕也其捕也其捕也其捕也其捕也其捕也  
其捕也其捕也其捕也其捕也其捕也其捕也

其之實也其之實也其之實也其之實也  
其之實也其之實也其之實也其之實也  
其之實也其之實也其之實也其之實也  
其之實也其之實也其之實也其之實也

石之  
石之  
石之  
石之



永二酉年八月

酒井古多氏領分

上列山田於相生新所

寄場

吉古馬



利古馬



良古馬



文古馬



芳古馬



八古馬



左古馬



右古馬



吉古馬



清古馬



茂古馬



治古馬




關東涉流江安


中山城一節棟


關 敵口節棟


安 系煮化棟


淺 野健藏棟


百餘代  
甚古也  



日  
九之儀  



日  
傳口節  


日  
口節之儀  


日  
清 藏  


日  
易古也  


名  
甚古也  


新 物  




花書之通今般 園東高其掃出如欲  
古乃其 作波之熱海必法其書中乃其  
仙史承其其其 控又判下之老古私考古  
意入其史版其其 承其其依之其清  
平形其其其其其其

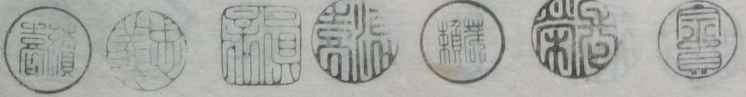
嘉永三年分月

吉村同  
判  
吉村

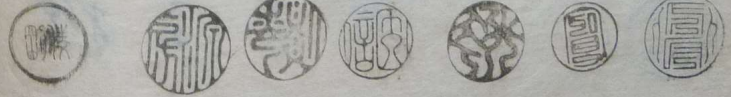




友吉  
 俊嘉  
 撫所 臣嘉  
 為嘉  
 馬如  
 作嘉  
 元嘉



二所  
 林吉  
 吉  
 廣吉  
 孫吉  
 木如  
 半如

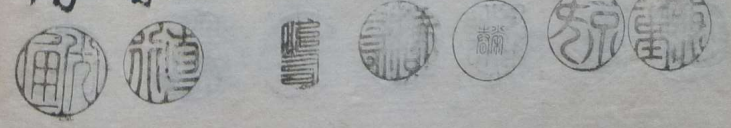




武如  
嘉慶  
深齋  
子所自  
存  
仁  
七





八  
法  
新  
老  
遠  
長  
子所自








所  
高  
存  
年


仙  
去  
所  



陈  
嘉  



熊  
新  



孝  
翁  


孝  
八  


至  
孝  


八  
子  
忠  


法  
如  


如  
如  




【本文解読文】

在々ニおゐて神事祭礼芝居興行等之儀ニ  
付而ハ前以度々申渡置候儀之處近年諸作  
豊熟打續候ニ随ひ自然与飢饉之艱難を  
忘連此節専芝居様之儀相催候村方も有之  
哉ニ相聞右者畢竟遊戯ニ多分之金銀を  
費し惰農困窮之始男女淫奔之謀ニ而  
果者親妻子を弄欠落いたし或者喧嘩  
口論之上一命ニも抱り候程之儀も出来終ニ者  
一家滅亡一村衰廢之基ニ而何連も百姓為ニ  
不相成義故御制禁罷成置候越相背若  
心得違右様之企有之候ハ、村役人共ハ  
差止万一不取用相催候村方ハ無用捨踏込  
召捕譬催し候跡ニ而承り候共嚴敷取調其筋へ  
差出し尤是迄跡ニ而承り左迄大形ニも無之  
類者寛宥之取斗等毛致置候得共以後ハ  
嚴敷及吟味候条得其心得違無之様  
小前一人別急度申聞請印可取置候

右被 仰渡之趣承知奉畏候依之御請書  
差上申候

酒井大学頭領分

上州山田郡桐生新町

寄場

嘉永二酉年八月

吉右衛門印

(中略 十七人)

年寄

甚左衛門印

名主

新 助印

関東御取締御出役



中山誠一郎様

関 畝四郎様

安原 燾作様

浅野 鍵蔵様

〔添書として〕

前書之通今般 関東御取締御出役様

方々被 仰渡之趣弥以堅相守可申旨被

仰聞承知奉畏候猶又判下之者江私共方

念入可申聞段是又承知仕候依之御請

印形差上ヶ申候以上

嘉永二酉年八月

壺町目

判頭

吉右衛門

(中略 三十七人)

町御役人中

【本文読み下し文】

在々において、神事祭礼芝居興行などの儀に

付いては前もつて度々申し渡し置き候儀のところ、近年諸作

豊熟打ち続き候に従い、自然と飢饉の艱難を

忘れ、この節専ら芝居様の儀、相催し候村方もこれ有り

やに相聞え、右は畢竟遊戯に多分の金銀を

費し、惰農困窮の始まり男女淫奔の謀りにて

はては親妻子を弄び欠落いたし、あるいは喧嘩

口論の上、一命にも抱り候程の儀も出来、ついには

一家滅亡、一村衰廢の基にて何れも百姓のために

相成ず義ゆえ、御制禁罷り成置き候を相背き、若し

心得違い右様の企てこれ有るの候わば、村役人どもより厳しく

差し止め、万一(このこと)を取り用いず相催し候村方は用捨なく踏み込み

召し捕り、たとえ催し候あとにて承り候とも、厳しく取り調べ、その筋へ

差し出し、尤も是まで跡にて承り左まで大形にもこれ無く



類は寛宥の取りはからいなども致し置き候へども以後は  
厳しく吟味に及び候条、とくと其意心得違ひこれ無きよう  
小前一人別、急度申し聞き請印取り置くべく候

右、仰せ渡されの趣き承知畏み奉り候、これに依って御請書  
差し上げ申し候

酒井大学頭領分

上州山田郡桐生新町

寄場

嘉永二酉年八月

吉右衛門印

(中略 十七人)

年寄

甚左衛門印

名主

新 助印

関東御取締御出役

中山誠一郎様

関 畝四郎様

安原 燾作様

浅野 鍵蔵様

〔添書として〕

前書の通り今般、関東御取締御出役様

方より仰せ渡されの趣き、いよいよもって堅く相守り申すべき旨

仰せ聞かされ承知畏み奉り候、なおまた判下の者へ私どもより

念を入れ申し聞くべき段、これまた承知つかまつり候これに依って御請

印形差上げ申し候、以上

嘉永二酉年八月

壱町目

判頭

吉右衛門

(中略 三十七人)

町御役人中



## 【解説】

幕末から明治へかけて、社会情勢は長い間、鎖国という国策の枷を外圧によって崩されていく時代でもありました。その間、数えてもわずか三十年。古文書に接するときは、必ずその文書が書かれた時代背景を知ることとも学習の一つであります。

嘉永二年、『桐生市歴史年表』から拾い出してみると、上州では国定忠治が捕縛され処刑された年でもあります。桐生新町では、絹買い商人の吉田清助夫妻が伊勢参宮をしたとあります。「なるほど」と予め、調べておき当時を想定しながら読んでいきます。

この文書からは、おおよそ何となく読めるのではないでしょうか。夏祭りも近づいてきましたので「祭礼」を話題にして文書を出題しました。

この文書は、近年、農作物の豊作がみこまれ、生業である野良仕事を怠り、遊興に励む気風を幕府役人、この場合、関東取締出役に御禁制に対し、法を守り、家業に励むことを組合(地域全体で)連判の上、報告したものです。

ここでいう「寄場」とは、組合のことをいいます。正式には御改革組合といい、幕府の関東地方における農政改革で、幕領・私領・寺社領など領主の異同に関係なく、村方を五ないし六ヶ村単位で小組合を作り、さらに地域ごとに十前後にまとめて大組合を作りました。その組合の代表が惣代です。これが明治になると小区・大区に引き継がれていきます。桐生地域では谷の田村永輔(助)が活躍します。

今回間違いやすいのは、「奥」と「興」。これは、文章の流れの前後関係で分かると思います。添文の書き手は、名主の長澤新助です。代々襲名していますが、独特の手筆で新助正緒と分かります。本文の最後の方ですが「踏込」が難解でしたが、前後の流れと文字の分解で旁(つくり)の上の部分が「水」。偏が足偏ですから、踏み込む・そして召し捕りと文章は流れていきます。文書の中程の「一家滅亡」と読みましたが、はじめは「込む」と見立てましたが、これでは意味が通らないので、筆の流れを手でなすると点から入りカタカナの「メ」をたどりつつ「L」と跳ねると「亡」となりました。(笑)

古文書学習は、難解ですが、楽しみながら続けていくことが解読の近道なので、す。